

関係流動性と孤独感の関連における 親密性の媒介効果の検討¹

横 田 晋 大*

(受付 2022年5月30日)

要 約

本研究の目的は、関係流動性と孤独感の関連における親密性の媒介効果を検討することである。近年、心理特性を個人が取り巻く社会環境への適応の結果として分析する社会生態学的アプローチの観点から孤独感が分析されており、社会における新たな出会いの機会の多寡である関係流動性が高いほど孤独感が低くなることが明らかにされている。一方、親密性は、高関係流動社会において関係を維持することから適応的であると主張されている。本研究では、関係流動性と孤独感および親密性の関連について、関係流動性と孤独感の関連を親密性が媒介するとの仮説を立て、一般人110名を対象とした質問紙調査にて検証を行った。その結果、親密性の媒介効果が得られ、関係流動性が高いと知覚するほど親友に対する親密度は高まり、結果として孤独感が低くなることが示された。

キーワード 社会生態学的アプローチ, 関係流動性, 孤独感, 親密性

人間は社会的動物である。そのため、日常生活における対人関係の形成・維持は非常に重要であり、それに関連する心理特性に関しても、数多くの知見が積み重ねられてきた (e.g., Lathren et al., 2021; Le, Impett, Lemay, Muise, & Tskhay, 2018)。Baumeister & Leary (1995) は、人間には所属欲求、すなわち「持続的、肯定的そして重要な対人関係を少なくとも最低限に形成し維持したいという広範な欲求」(Baumeister & Leary, 1995, p. 497) があるという。この所属欲求は、人の思考、感情、対人行動を動かす基本的な動機となるのである。そのため、この欲求が満たされないような状況、すなわち社会的に孤立した状況におけることは、健康状態に大きく影響することが頑健に示されている (e.g., Holt-Lunstad, Smith, Baker, Harris, & Stephenson, 2015)。そこで、本研究では、社会生態学的アプローチ (e.g., Nisbett & Cohen, 1996; Oishi & Graham, 2010; Yamagishi & Yamagishi, 1994; Yuki & Schug, 2012) の立場から、孤独感の規定因を明らかにすることを目的とする。社会生態学的アプローチとは、人間が持

* 広島修道大学健康科学部

¹ 本論文は、河村優衣氏による2021年度卒業論文のデータの再分析を行い、再構成したものである。河村氏には、研究アイデア、研究計画およびデータ収集において多大な貢献をしていただいた。ここに記して感謝する。

つ心理・行動傾向が、社会的環境への適応の結果として備わったものであり、心理特性を理解するにあたり、その人を取り巻く社会環境に着目し、その環境下で心理特性がどのように個人のメリット・デメリットを生み出すかを分析する観点である（亀田・村田，2000）。この立場に立つと、新しい人との関係形成の機会の多寡である関係流動性（Relational mobility: e.g., Yamagishi & Yamagishi, 1994; Yuki et al., 2007）が孤独感の先行要因の一つとして挙げられる。関係流動性と孤独感の関連を検討した知見では、関係流動性が高いほど孤独感が低いという負の関連が見出されている（e. g., Badman, Nordström, Ueda, & Akaiishi, 2022; Heu, Hansen, & van Zomeren, 2021）。一方、関係流動性と孤独感の関連の背後にどのような心理特性が働いているかは明らかになっていない。そこで、本研究では、対人関係における親密性に注目し、関係流動性と孤独感の関連における親密性の媒介効果を検討する。

孤独感と親密性

孤独感とは、自分が望む対人関係と自分が現在感じている対人関係との間に不一致があるときに経験する嫌悪的な状態と定義される（Peplau & Perlman, 1982）。孤独感とは心身の健康状態に影響する心理特性の一つである（e.g., Wang et al., 2018）。例えば、孤独感が高いことは、うつ病（e.g., Weeks, Michela, Peplau, & Bragg, 1980）や不安障害（e.g., Dour, et al., 2014）など、様々な精神疾患と関連することが報告されている。さらに、孤独感とは、冠動脈性心疾患や脳卒中の発症（Valtorta, Kanaan, Gilbody, Ronzi, & Hanratty, 2016）、収縮期血圧の上昇（Hawkey, Thisted, Masi, & Cacioppo, 2016; Yang, Boen, & Harris, 2015）、慢性疼痛（Jaremka et al., 2014）との関連が実証的に示されている。

一方、対人関係の良好さや安定性に影響を及ぼす要素の一つとして親密性が挙げられている（Sternberg, 1986）。親密性とは、対人関係における相手との近接さや心理的なつながりの強さのことである。親密性の強さは関係の段階とともに変化し、関係維持段階で強い親密性を感じる事が関係維持に必要とされる。そして、他者との近しく親密な愛着の欠如は孤独感をもたらす（Weiss, 1973）ことから、親密性は孤独感の近接因であると考えられる。

関係流動性と親密性および孤独感

近年、様々な心理特性の文化差の説明として、社会環境要因の影響を分析する社会生態学のアプローチに注目が集まっている。このアプローチでは、文化差を説明する要因の一つとして、社会における新規の出会いの機会の多寡、つまり関係流動性に注目する（Yamagishi & Yamagishi, 1994）。新規の出会いが多い高関係流動社会（欧米や大都市など）では、個人が自由に対人関係を形成したり解消したりする機会が豊富である。一方、新規の出会いが少ない低関係流動社会（東アジアや村落など）では、人々は閉鎖的なコミットメント関係を形成し

ており、個人の任意による対人関係の形成や既存関係から離脱する機会に乏しい社会である。社会生態学的アプローチでは、各社会において、その社会に適応的な行動をもたらす心理特性が異なると考え、その違いが文化差として現れると解釈する。

山田・鬼頭・結城（2015）は、東アジア人よりも欧米人の方が対人関係において強い親密性を示すとの文化差（Marshall, 2008; You & Malley-Morrison, 2000）について、社会生態学的アプローチから説明を試みた。彼女らは、親密性が相手を自分の元につなぎ留めておく機能を果たすと考えた。高関係流動社会における対人関係の形成のしやすさは、裏返せば離脱のしやすさでもあり、良い対人関係を形成してもそれを維持することが難しいことを意味する。一方、低関係流動社会では、その関係性から排除される可能性はあるとはいえ、一度形成された関係は解消されにくい。そのため、関係維持にコストを掛ける必要がなく、強い親密性を持つことのメリットは比較的少ないと言える。山田他は、日本人とカナダ人における親密性と関係流動性の関連を検討した。その結果、カナダの方が日本人よりも友人関係と恋愛関係における親密性が高く、友人関係における親密性の日加差は、両社会間の関係流動性の差異によって説明された。よって、親密性の文化差は、カナダが日本よりも関係流動性の高い社会であることにより説明されることが示された。また、最も親しい家族に対する親密性に関しては、日加差が見られなかった。以上より、友人関係においては、対人関係の選択・離脱の自由度が高い社会環境ほど、人々が対人関係において感じる親密性が高くなることが示された。

近年、孤独感に関しても、社会環境要因の影響が検討されている。社会生態学的アプローチから考えると、高関係流動社会では孤独感は低くなることが予測される（Heu, Hansen, & van Zomeren, 2021）。高関係流動社会は対人関係の市場であり、新しい関係を形成することが容易であるため、孤独感を回避することは比較的容易だからである。一方、低関係流動社会での対人関係は固定的であり、孤独感を覚えることは社会的に孤立することを意味する。低関係流動社会における社会的孤立は個人の利得を著しく下げため、適応的ではない。よって、低関係流動性社会に住む人々には仲間外れを回避するための心理特性が備わっており（Yamagishi, Hashimoto, & Schug, 2008）、常に固定的な関係を維持していると考えれば、孤独感が高くなることはないと考えられる。Heu, Hansen, & van Zomeren（2021）は、欧州4カ国の幅広い年齢層のサンプルにおいて、一貫して関係流動性の高さ（新たな関係を形成できる機会の多さ）は、孤独感の低さをもたらすことを示した。一方、関係流動性の低さ（対人関係の安定性）は孤独感との関連は国によっては見られず、比較的關係流動性が高い社会においても低い社会においては異なる結果が得られることを示している。また、Badman, Nordström, Ueda, & Akaiishi（2022）は、日本人を対象として、関係流動性が高いと知覚している人ほど孤独感が低いことを示した。この知見は、国などの大規模な社会のみならず、

それぞれの社会の中でも、関係流動性の知覚の個人差によって、各個人の持つ行動・心理が異なることを示している。

本研究の仮説

このように、先行研究では、関係流動性と親密性および孤独感との関連が示されている。親密性が孤独感の先行要因であるならば、関係流動性と孤独感の関連において親密性が媒介変数として働く可能性が考えられる。本研究では、山田・鬼頭・結城（2015）の知見に基づき、親友との親密性を測定した。もし本研究のモデルが妥当であれば、関係流動性を高く知覚する人ほど、関係を維持している親友への親密性が高いため、孤独感が低くなると考えられる。ただし、本研究のモデルが妥当ではない場合も考えられる。それは、高関係流動社会における孤独感の低さが新たな機会の多さによりもたらされるとの前提（Heu et al., 2021）を踏まえると、関係を維持できていることよりも、新しい出会いの機会が多いと知覚することの方が重要だと考えられる。よって、本研究では、関係流動性と孤独感の関連において、親友への親密性と新たに出会った人の数がそれぞれ媒介効果を持つかについて検討することを目的とする。

以上を踏まえ、本研究では次の3つの仮説を検証する。関係流動性が高いほど親密性は高くなるだろう（仮説1）。関係流動性が高いほど孤独感は低くなるだろう（仮説2）。関係流動性と孤独感の関連は、親密性によって媒介されるだろう（仮説3）。

方 法

調査回答者

調査対象者は、株式会社ランサーズのアンケートモニター110名（男性：67名、女性42名、答えたくない1名）であった。

手続き

回答者は、まずインフォームド・コンセントを読み、同意した後に質問紙に回答した。全ての質問項目に回答した後、デブリーフィングを読み、データの使用に関する同意に回答した。回答時間はおおよそ10分であった。回答後、報酬として、ランサーズから1人あたり100円が支払われた。

尺度

孤独感 孤独感の測定には工藤・西川（1983）が邦訳した改訂版 UCLA 孤独感尺度を用い

た。「私は人とのつきあいが無い。」など20項目であった。各項目について、1：決して感じない、2：めったに感じない、3：時々感じる、4：しばしば感じる、の4件法で測定した。

関係流動性 関係流動性の測定には、Yuki et al. (2007) の関係流動性尺度を用いた。「あなたの身近な社会（学校、職場、住んでいる町、近隣など）に住む人々についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、あなたの周りの人々にどれくらい当てはまるかを答えてください。」と尋ね、12項目について、1：全くそう思わない、2：そう思わない、3：あまりそう思わない、4：少しそう思う、5：そう思う、6：とてもそう思う、の6件法にて測定した。同時に、最近7日間、30日間、90日間で、参加者自身が新しく知り合いや友人になった人の数も回答した。

親密性 親密性の測定には、金政・大坊（2003）が邦訳した愛情の三角理論尺度における親密性因子を測定する項目のみを用いた。「あなたと最も親しい友人についてお尋ねします。次のそれぞれの文が、どれくらい当てはまるかを答えてください。」と尋ね、「〇〇さんとの関係は居心地の良いものである。」など10項目について1：全く当てはまらない、3：あまり当てはまらない、5：どちらでもない、7：やや当てはまる、9：非常に当てはまる、の9件法にて測定した。

結 果

調査に回答した110名のうち、回答を分析に使用することに同意しないと回答した人を除外した109名（男性66名、女性42名、答えたくない1名）を分析対象とした。平均年齢は42.81歳（ $SD=10.20$ ）であった。信頼性係数と記述統計量を Table 1 に示す。全ての尺度において、十分な内的一貫性が得られた（ $\alpha > .75$ ）

Table 1 Alpha coefficients and statistical description in each scale

	α	N	M	SD	$Min.$	$Max.$
Loneliness	.97	109	2.62	0.70	1.24	3.86
Intimacy	.97	109	5.51	2.03	1.00	8.90
RM	.75	109	3.72	0.63	2.08	5.58
7 days	-	109	0.06	0.31	0.00	2.00
30 days	-	109	0.49	1.36	0.00	8.00
90 days	-	109	1.38	2.56	0.00	15.00

Note. RM, 7 days, 30 days and 90 days mean "Relational Mobility," "the number of new friends and acquaintances during 7 days", "the number of new friends and acquaintances during 30 days" and "the number of new friends and acquaintances during 90 days," respectively.

Table 2 Correlational coefficients among scales

	Loneliness	Intimacy	RM	7 days	30 days
Loneliness	-				
Intimacy	-.73**	-			
RM	-.45**	.42**	-		
7 days	-.21*	.14	.18	-	
30 days	-.22*	.20*	.20*	.67**	-
90 days	-.31**	.28**	.21*	.76**	.84**

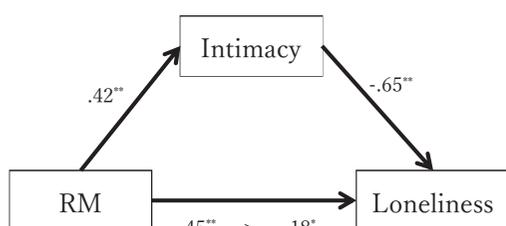
* $p < .05$, ** $p < .01$ 

Figure 1. The mediation effect of intimacy on the relationship between relational mobility and loneliness

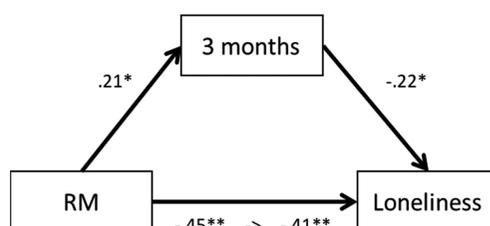


Figure 2. The mediation effect of the number of new friends/acquaintances in three months on the relationship between relational mobility and loneliness

相関分析を行った結果 (Table 2), 関係流動性と親密性には正の相関関係 ($r = .42, p < .01$), 関係流動性と孤独感には有意な負の相関関係 ($r = -.45, p < .01$) が見られた。そして, 親密性と孤独感には有意な負の相関 ($r = -.73, p < .01$) が示された。さらに, 7日間, 30日間, 90日間に会った新しい友人・知り合いの数も, それぞれ孤独感と負の相関関係であった ($r_s > .20, p_s < .05$)。

関係流動性と孤独感の関連における親密性と新しい出会いの人数の媒介効果を検討した (Figure 1, 2)²。Bootstrap法を用いた媒介効果の検定を行った結果, 親密性は, 部分的ではあるが, 有意な媒介効果が示された ($Z = 4.30, p < .01$)。一方, 新たな出会いの人数では, 7日間, 30日間, 90日間のいずれも有意な媒介効果が示されなかった ($Z_s < 1.85, p_s > .06$)。

² 山田他は関係流動性における下位概念の中でも, 関係形成・解消の自由度では国と親密性との関連における媒介効果を見出したが, もう一つの下位概念である新規出会いの機会では効果が見られなかったことを報告している。本研究のデータにおいて, 媒介モデルの関係流動性を各下位概念に置き換えて分析したところ, いずれの下位概念においても媒介効果は見られた ($Z_s > 3.55, p_s < .01$)。ただし, 新規出会いの機会 ($\alpha = .90$) では間接効果のみ有意であったが (媒介変数の投入前: $\beta = -.41, p < .01$, 投入後: $\beta = -.18, p < .05$), 関係形成・解消の自由度 ($\alpha = .88$) では完全媒介されていた (媒介変数の投入前: $\beta = -.35, p < .01$, 投入後: $\beta = -.10, p = .18$)。以上の結果から, 山田他の結果が一部再現されたと言える。

考 察

本研究の目的は、孤独感に影響を与える先行要因を明らかにすることであった。そこで、本研究では、孤独感の規定因として関係流動性と親密性に注目した。先行研究より、関係流動性と孤独感は負の関連 (Badman et al., 2022; Heu et al., 2021)、関係流動性と親密性は正の関連 (山田・鬼頭・結城, 2015) が明らかになっている。高関係流動性社会では対人関係において親密性を高く知覚することが適応的であるとの主張に基づき、本研究では、関係流動性が高いほど、対人関係における親密性が高まり、結果として孤独感が低下するとの媒介モデルを立てた。ただし、関係流動性と孤独感の関連は新たな出会いの機会の多さによりもたらされるという仮定 (Heu et al., 2021) から、媒介変数として新たな出会いの数も考えられる。そこで、本研究では、関係流動性と孤独感の関連において、親友への親密性と新たな出会いの人数が媒介効果を持つか否かについて、質問紙調査を通じて検討した。その結果、先行研究の結果と一貫して、関係流動性と孤独感に負の関連が見られ、関係流動性と親密性には正の関連が見られた。これらは仮説 1 と仮説 2 を支持するものであった。また、関係流動性と孤独感の関連において、親密性には媒介効果が見られたが、新たな出会いの人数には媒介効果が見られなかった。この結果は仮説 3 を支持するものであった。すなわち、関係流動性が高い社会であると知覚している人は、親友に対して強く親密性を抱き、その結果として孤独ではないと感じていることが示された。このことは、高関係流動社会において親密性が適応的であるとの山田他の主張を支持するものでもある³。

本研究の問題点は、次の 3 点ある。まず、孤独感において、関係流動性が高い社会と低い社会での差が検討されていない。孤独感は東アジア人の方が欧米人よりも高いことが示されている (e.g., Anderson, 1999)。山田他が示したように、社会生態学的アプローチを用いると、孤独感の文化差についても関係流動性の媒介効果が得られることが考えられる。今後は、文化間比較を実施するべきであろう。また、本研究の調査では、最も親しい人への親密性しか測定していなかった。山田他では、恋人と家族への親密性も測定しており、恋人への親密性の文化差には関係流動性の媒介効果が見られず、家族に対する親密性には文化差が見られないことを示している。さらに、対人関係においては親友よりは弱いつながりである「友人」

³ 紙面の都合上、掲載することができなかったが、山田他の主張を検証する分析として、親密性の調整効果を検討することも重要である。独立変数を関係流動性と親密性、その交互作用項、従属変数を孤独感とした重回帰分析を行った結果、交互作用項は有意であった (関係流動性: $\beta = -.16, p < .05$, 親密性: $\beta = -.68, p < .01$, 交互作用項: $\beta = -.21, p < .01, R^2 = .60, p < .01$)。単純主効果検定の結果、親密性が高い人においては関係流動性と孤独感の負の関連が見られ ($p < .01$)、低い人ではその関連は有意ではなかった (*ns.*)。この結果は、高関係流動社会では親密性が適応的な心理特性であることを示唆している。

や「知り合い」に関する親密度は検討されていない。もし孤独感において新たな出会いの機会が重要となるならば、より弱いつながりである友人や知り合いにおいて効果を持つかもしれない。上記の問題点も踏まえ、様々な対人関係の親密度を測定し、その媒介効果について検討することが必要だろう。最後に、本研究では、関係流動性と孤独感の関連における親密性の媒介効果が見られたが、あくまで部分媒介であり、関係流動性の直接効果は弱いながらも残存していた。この結果は、関係流動性と孤独感の関連において、親密性以外に媒介効果を持つ潜在的な変数の存在を示唆している。今後は、他の媒介変数となり得る心理特性の効果を検討するべきであろう。

引用文献

- Anderson, C. A. (1999). Attributional style, depression, and loneliness: A cross-cultural comparison of American and Chinese students. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 25(4), 482-499. Doi: <https://doi.org/10.1177/0146167299025004007>
- Badman, R. P., Nordström, R., Ueda, M., & Akaishi, R. (2022). Perceptions of Social Rigidity Predict Loneliness Across the Japanese Population. <https://doi.org/10.31234/osf.io/8jq6s>
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529. Doi: <https://doi.org/10.1037/0033-2909.117.3.497>
- Cohen, D., Nisbett, R. E., Bowdle, B. F., & Schwarz, N. (1996). Insult, aggression, and the southern culture of honor: An "experimental ethnography." *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 945-960. Doi: <https://doi.org/10.1037/0022-3514.70.5.945>
- Dour, H. J., Wiley, J. F., Roy-Byrne, P., Stein, M. B., Sullivan, G., Sherbourne, C. D., ... & Craske, M. G. (2014). Perceived social support mediates anxiety and depressive symptom changes following primary care intervention. *Depression and anxiety*, 31, 436-442. Doi: <https://doi.org/10.1002/da.22216>
- Hawkey, L. C., Thisted, R. A., Masi, C. M., & Cacioppo, J. T. (2010). Loneliness predicts increased blood pressure: 5-year cross-lagged analyses in middle-aged and older adults. *Psychology and aging*, 25, 132-141. Doi: <https://doi.org/10.1037/a0017805>
- Heu, L. C., Hansen, N., & van Zomeren, M. (2021). Resolving the cultural loneliness paradox of choice: The role of cultural norms about individual choice regarding relationships in explaining loneliness in four European countries. *Journal of Social and Personal Relationships*, 38(7), 2053-2072. <https://doi.org/10.1177/02654075211002663>
- Holt-Lunstad, J., Smith, T. B., Baker, M., Harris, T., & Stephenson, D. (2015). Loneliness and social isolation as risk factors for mortality: a meta-analytic review. *Perspectives on Psychological Science*, 10, 227-237. <https://doi.org/10.1177/1745691614568352>
- Hughes, S., Jaremka, L. M., Alfano, C. M., Glaser, R., Pivoski, S. P., Lipari, A. M., ... & Kiecolt-Glaser, J. K. (2014). Social support predicts inflammation, pain, and depressive symptoms: longitudinal relationships among breast cancer survivors. *Psychoneuroendocrinology*, 42, 38-44. Doi: <https://doi.org/10.1016/j.psyneuen.2013.12.016>
- Jaremka, L. M., Andridge, R. R., Fagundes, C. P., Alfano, C. M., Pivoski, S. P., Lipari, A. M., Agnese, D. M., Arnold, M. W., Farrar, W. B., Yee, L. D., Carson, W. E. III, Bekaii-Saab, T., Martin, E. W., Jr., Schmidt, C. R., & Kiecolt-Glaser, J. K. (2014). Pain, depression, and fatigue: Loneliness as a longitudinal risk factor. *Health Psychology*, 33, 948-957. Doi: <https://doi.org/10.1037/a0034012>
- 亀田達也・村田光二 (2010). 複雑さに挑む社会心理学 改訂版: 適応エージェントとしての人間 有斐閣
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 愛情の三角理論における 3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, 10, 11-24. Doi: <https://doi.org/10.4092/jsre.10.11>

- 工藤力・西川正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) 実験社会心理学研究, **22**, 99-108. Doi: <https://doi.org/10.2130/jjesp.22.99>
- Lathren, C. R., Rao, S. S., Park, J., & Bluth, K. (2021). Self-compassion and current close interpersonal relationships: A scoping literature review. *Mindfulness*, **12**, 1078-1093. Doi: <https://doi.org/10.1007/s12671-020-01566-5>
- Le, B. M., Impett, E. A., Lemay, E. P., Jr., Muise, A., & Tskhay, K. O. (2018). Communal motivation and well-being in interpersonal relationships: An integrative review and meta-analysis. *Psychological Bulletin*, **144**, 1-25. Doi: <https://doi.org/10.1037/bul0000133>
- Marshall, T. C. (2008). Cultural differences in intimacy: The influence of gender-role ideology and individualism—collectivism. *Journal of Social and Personal Relationships*, **25**, 143-168. Doi: <https://doi.org/10.1177/0265407507086810>
- Oishi, S., & Graham, J. (2010). Social ecology: Lost and found in psychological science. *Perspectives on Psychological Science*, **5**, 356-377. Doi: <https://doi.org/10.1177/1745691610374588>
- Peplau, L. A., & Perlman, D. (1982). *Loneliness: A sourcebook of current theory, research and therapy*. John Wiley & Sons Inc.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 119-135. Doi: <https://doi.org/10.1037/0033-295X.93.2.119>
- Valtorta, N. K., Kanaan, M., Gilbody, S., Ronzi, S., & Hanratty, B. (2016). Loneliness and social isolation as risk factors for coronary heart disease and stroke: systematic review and meta-analysis of longitudinal observational studies. *Heart*, **102**, 1009-1016. Doi: [10.1136/heartjnl-2016-310034](https://doi.org/10.1136/heartjnl-2016-310034)
- Wang, J., Mann, F., Lloyd-Evans, B., Ma, R., & Johnson, S. (2018). Associations between loneliness and perceived social support and outcomes of mental health problems: a systematic review. *BMC psychiatry*, **18**, 1-16. Doi: <https://doi.org/10.1186/s12888-018-1736-5>
- Weeks, D. G., Michela, J. L., Peplau, L. A., & Bragg, M. E. (1980). Relation between loneliness and depression: A structural equation analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 1238-1244. Doi: <https://doi.org/10.1037/h0077709>
- Weiss, R. S. (1973). *Loneliness: The experience of emotional and social isolation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Yamagishi, T., Hashimoto, H., & Schug, J. (2008). Preferences versus strategies as explanations for culture-specific behavior. *Psychological Science*, **19**, 579-584. Doi: <https://doi.org/10.1111/j.1467-9280.2008.02126.x>
- Yamagishi, T., & Yamagishi, M. (1994). Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and emotion*, **18**, 129-166. Doi: <https://doi.org/10.1007/BF02249397>
- Yang, Y. C., Boen, C., & Mullan Harris, K. (2015). Social relationships and hypertension in late life: evidence from a nationally representative longitudinal study of older adults. *Journal of aging and health*, **27**, 403-431. Doi: <https://doi.org/10.1177/0898264314551172>
- You, H. S., & Malley-Morrison, K. (2000). Young adult attachment styles and intimate relationships with close friends: A cross-cultural study of Koreans and Caucasian Americans. *Journal of Cross-cultural psychology*, **31**, 528-534. Doi: <https://doi.org/10.1177/0022022100031004006>
- Yuki, M., & Schug, J. (2012). Relational mobility: A socioecological approach to personal relationships. In O. Gillath, G. Adams, & A. Kunkel (Eds.), *Relationship Science: Integrating Evolutionary, Neuroscience, and Sociocultural Approaches* (pp. 137-151). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/13489-007>
- Yuki, M., Schug, J., Horikawa, H., Takemura, K., Sato, K., Yokota, K., & Kamaya, K. (2007). Development of a scale to measure perceptions of relational mobility in society (CERSS Working Paper 75). Sapporo, Japan: Hokkaido University, Center for Experimental Research in Social Sciences.

Abstract

The mediation effect of intimacy on the relationship
between relational mobility and loneliness

Kunihiro YOKOTA

Loneliness has been considered as a factor that is associated with negative physical and mental health outcomes. This study aimed to explore the determinants of loneliness and focused on relational mobility and intimacy as the factors. Previous studies have showed that loneliness were related to intimacy and relational mobility, that is individuals' perception how many opportunities to meet newcomers in their society. Moreover, relational mobility was negatively correlated with intimacy with best friends. Following these findings, I hypothesized the mediation effect of intimacy on the relationship between relational mobility and loneliness. 110 responders completed a web-based questionnaire. Consistent with the hypothesis, the results showed the relationship between relational mobility and loneliness was mediated by intimacy with best friends.

Keywords: socioecological approach, relational mobility, loneliness, intimacy

* Hiroshima Shudo University, Department of Health Sciences